南太平洋海域調査研究報告　No.45（2006年３月）
OCCASIONAL PAPERS　No.45（March 2006）

鹿児島における平和教育
Education of Peace in Kagoshima

新名主健一

SHINMYOUZU Keniti

鹿児島大学教育学部
〒890-0065 鹿児島市郡元１丁目20-6

Department of Education Kagoshima University
〒890-0065 1-20-6 Kourimoto Kagoshima-si

要　約

平和教育の概念は二つの層に分けてとらえられる．一つは「戦争反対！」のようなスローガンに代表される戦争の回避・防止に関わる教育である．もう一つは「平和でのどかな風景だ」というような状況が，人間の存在を脅かす他の何ものもなく，その状況の構成要因が，あるべき姿を保っているかどうかの検証の教育である．具体的には政治・経済・社会・環境等が人間の幸せを希求するような教育である．後者は前者の背景をなしている．

本論は以上のような前提の下，長崎大学・琉球大学・鹿児島大学のシラバス等から，鹿児島大学での平和教育の実態を検討し問題点を指摘した．また鹿児島県での平和教育の取り組みを二つの例をあげて検討し問題点を指摘した．次に論者が国語科教育学を専門とするので，国語科教科書に出てくる「一つの花」「石うすの歌」の平和教材としての妥当性の検討と問題点の指摘を行ったものである．

Key words: 平和教育，認識の順序，平和教材

はじめに

三大学連携事業の第一回の会合の時，論者は「平和教育・国際理解」部会に所属することになった．時あたかも小泉首相の靖国神社参拝に対し，中国・韓国が強い抗議の意を示していた．Ａ級戦犯がまつられているにせよ，第二次世界大戦で尊い命を失った方々の霊がまつられている靖国神社への参拝について，小泉首相は次のように言っている「第二次世界大戦で尊い命を失われた多くの方の慰霊と平和への祈りと不戦の誓いをするためにきた」．このことばと中国・韓国の怒りとのギャップは，論者の理解を超えたものであった．Ａ級戦犯がまつられているせいばかりではなさそうである．そういうことも，この部会へ入った理由である．

とうてい短期間に鹿児島における平和教育をまとめることはできないことは，自明のことである．本論は現在入手できる資料の検討を通して問題点をとらえ，あわせて論者自身の平和教育への視座を得ることを目的とする第一歩となるものと考えている．

1．平和の概念

「戦争と平和」というように相対立する概念でとらえた時，平和は（人の殺し合いのない状態）という狭義の意味になる．これに対し（戦争の生成の発端・原因等の因果律を構成する要素になる政治・経済・社会・環境等が，それぞれ人間の存在に好ましいものとして機能している状態）という広義の意味でとらえることができる．この二つを総称して「平和」としたい．

一般には「人間性」という語は，人間の持つすばらしさの発現のような理解のされ方がある．例えば「読書と豊かな人間性」「人間性を高めるために」という使用例から，そのことが理解できよう.しかしながら戦争で人を殺し合うことも人間性の現れである．すると人間性という語にはプラスとマイナスの意味があり，より正確に使用する時は，それぞれ限定句をつける必要がある．それと同じように「平和」の語にも，「平和を取りもどすために戦うのだ」と一方が言えば，相手方も「平和を維持するために戦うのだ」と言うようなことも，昨今の報道番組から流れている．お互いの希求する平和のあり方が社会性，具体的には国民性・文化性等によって異なっていることに気づかされる．後述するように人の認識の順序にも，社会性・文化性・国民性によって違いがあるのではなかろうか．

以上のようなことをふまえた上で「平和」の語を使用したい．

2．長崎大・琉球大・鹿児島大による平和教育への取り組み

長崎大学での平和教育（以下は「長崎大学の平和教育の概要」《舟越耿一》によっている）の取り組みは次のようになっている．

① 長崎大学の『長崎大学・大学改革案－長崎大学が21世紀に目指すもの－』の中で，「平和についての教育」を「全学教育の中にも組み込み，充実を図っていくこと」と明記している．

② 83年から続いている「平和講座」の取り組み

③ 一年生の必修として教養特別講義３コースが開設され，全15回のうち３回が「平和」にあてられている．

④ 教育学部では情報文化教育課程で「平和学」が， 3年生の必修とされる2004年度から「平和と文化共生に関する教育研究センター」が開設された．学校教育教員養成課程で「平和・多文化教育論」の授業が始まる．

⑤ 教育学部の平和関連授業としては他に，「総合演習」の中で「国際理解演習」「平和多文化教育演習」のコースがある．

⑥ 全学教育では「平和講座」をベースにして，教養特別講義の「平和」がある．その上に，教育学部では情報文化教育課程に「平和学」，学校教育教員養成課程に「平和・多文化教育論」と「総合演習」が重なる構造になっている．

その他，特徴的なこととして次のようなことがあげられる．

・平和講座－学部を越えて教員が結集し，オムニバス形式で授業を担当する．

・平和学－エクスポージャー（Exposure），すなわち「現場に行って五感で学ぶ」という手法にもとづいてレポートを作成し発表するという形態をとっている．

・「平和・多文化教育論」で韓国の大学との交流授業，「平和多文化教育演習」ではエクスポージャーを中心にした授業を行う．

琉球大学での平和教育への取り組みは下記のようになっている（シラバスより）.

・共通教育「沖縄の基地と戦跡Ⅰ」の授業の趣旨は，沖縄の基地や沖縄戦の具体像をとおして平和を考える.
・「沖縄の基地と戦跡Ⅱ」の授業の趣旨は，沖縄の基地や沖縄戦の具体像をとおして平和を考え，基地と戦跡を具体的に案内できる力を養うとある.
・共通教育「戦争と平和の諸問題」の授業内容は，「戦争を防ぎ，平和を達成するにはどのようにすれば良いのか？」という問題意識に基づき，広く戦争と平和に関する諸問題を扱う．さまざまな角度から21世紀国際社会に平和を定着させる方法を考える.
・共通教育「核の科学」の授業内容は，核問題を中心とした総合的な平和教育である．複数の教官が担当する．達成目標に，「戦争」に対置される「平和」の課題のみならず，人権・開発・南北問題，いわゆる構造的暴力をもたらすとされる諸問題，地球環境問題等も広義の「平和」の課題として取り入れるという記述が見られる.

教育学部では「平和と地域・総合演習ⅩⅥ」で，①沖縄戦に関する歴史認識・事実認識を深めていただき，最低限必要な沖縄戦認識を構築していただく．②そのうえで，「沖縄戦を子どもたちとどう学びあえるのか」というテーマで，教室ではなく，校外学習のオリジナルプログラムをつくっていただく，という目標で設けられている（長崎大学・琉球大学共に2000年以降の資料から抜粋した）.

両大学の平和教育の特徴は，それぞれ地域が教材となっていること（被爆地・上陸作戦）があげられる．また，エクスポージャー，フィールドワークを取り入れていることが目につく.

長崎大学では，全学でする平和教育が，長崎大学生の「教養」として位置づけられていることに特色がある．長崎大学の理念の中に，「豊かな心を育み，地球の平和を支える科学を創造することによって，社会の調和的発展に貢献する」とうたわれている．これらのことから，長崎大学全体での取り組みがなされていると推察できる.

琉球大学の特色としては，戦地（上陸作戦の）であったことや 核の問題が中核としてあり，背景的な要因は割合として，そう多くない取り上げ方であることがあげられる.

次に鹿児島大学での平和教育の取り上げ方を見てみることにする.

共通教育の教養科目に「平和学」がある．その内容は，長崎・広島に対する原爆投下と，戦後の被爆者の問題を取り上げて，日米双方の歴史認識のあり方や，戦後の対応の変遷を多角的に取り上げていくものである．これ以外では，広義の「平和教育」の範疇に入ると思われる，「フランスにおける日本のイメージ」「国際異文化交流」「国際交流のすすめ」「国際関係論」「日中交流史Ⅰ・Ⅱ」が，共通教育科目としてある.

鹿児島大学における平和教育は，上述の二大学に比べて，広義の意味での「平和」に関わる講義科目が多いのが特徴であり，平和教育に関わる科目を必修科目としていないことも特記される.

3．鹿児島県教職員組合発行「鹿児島の教育」による「平和教育」の実践の変遷と問題点

これは毎年秋に開催される教育研究集会分科会（26）のまとめである．その中に「平和と民族の教育」という分科会があり，その中で平和教育への取り組みが記されている．今回，既発行の全てを入手できずに，その平和教育の中身を分析できなかったが，稿を

改めて他日を期したい．ただし，1986年の第36集に，平和教育資料回収命令が出されたり，被爆体験談阻止事件があったことが記されている．今から20年前のことである．当時の状況と現在とではかなり異なっていることが，次の平和教育の実践でわかる．

4．附属小学校・代用附属小学校での平和教育の実践

2005年11月29日に南日本新聞に，附属小学校で空爆体験者を招いた社会科の授業があったことが掲載された．授業のねらいは，戦争の現実を知り，平和や今後の生き方を考えて欲しいということで，生の声に触れた児童は，想像以上の悲惨さに衝撃を受けたとある．新聞記事以外の資料を入手できず，これ以上のことを知ることはできないが，いわゆる平和教育が行われたことは，多分画期的なことではなかったろうか．

また同年12月２日には，代用附属である田上小学校６年１組で，「長く続いた戦争と人々のくらし」という単元で，社会科の授業がなされた．目標は，戦争中の田上の様子を，新聞記事や爆弾投下位置図などの資料をもとに考え，戦争に対する自分なりの考えを深めることができるというものであった．田上校区（中園地区）に投下された爆弾の詳細な被弾図や戦時中の証言の新聞記事が，資料として児童に渡されている．

20年前はタブーに近い扱いを受けていた平和教育は，社会科という教科の中で，できるようになったという世相の変化に注目したい．

5．小学校国語科文学作品教材「一つの花」「石うすの歌」（光村本）の平和教材としての検討

「一つの花」については，「この作品は戦争を真正面から描かないで～中略～両親への情愛と平和への願いをうたっている」（「文学重要教材の授業展開」（1982・明治図書）と，平和教材として取り上げている．「石うすの歌」も同様に取り上げられている．一般的に平和教材は戦争を契機にしておこるできごとを通して，子どもたちに平和の尊さを考えさせるものとされる．ところが，この二つの作品で，被害者は日本人である．この作品を読んで戦争は残酷だとか，平和の尊さとかの感想が出てくるのはおかしい．例えば愛する人が,全く非のない交通事故で死んだとしよう．すると被害者の側であれば,加害者の人間性や落ち度への糾弾に意識が向くのが，順当な認識の順序であって，それらが時間的な経過にしたがって昇華していった結果が，交通事故絶滅等になるはずである．加害者はいるのだが，その部分が欠落してしまい一足とびに「戦争のむごさ」に結びついてしまっている．そのようなキャッチフレーズ的なとらえ方は，人類共通の平和への希求とはかけ離れたものになり，「平和教育」にはなり得ないのではなかろうか．

加害者でもあり被害者でもあるという両面を描いた文学作品の発掘と創作を期待したい．